

Rudy Kousbroek ルディ・カウスブルック

De Aibaarheidsfactor

すてきな手触り、あるいは《なでなで》考

Fragmentvertaling in het Japans door Yumiko Kunimori

断章翻訳：國森由美子

Over de auteur en het boek	原著者および原著について	2
1. Het contract (blz.25 t/m 31)	<small>コントラクト</small> 契約	3
2. De zelfgebouwde kat (blz.119 t/m 129)	DIY 工作猫	7

ルディ・カウスブルック『(仮題) すてきな手触り、あるいは《なでなで》考』



原著名：De Aaibaarheidsfactor

刊行年：1969年初版、1978年増補版

出版社：Atlas Contact

ページ数：156

原著者および原著について

詩人、ジャーナリスト、評論家、翻訳家など、いくつもの顔を合わせ持つ作家、ルディ・カウスブルック（Rudy Kousbroek、1929～2010）は、とりわけエッセイストとして有名だった。少年時代から動物好きで、特に猫を心から愛していた作家が1969年に本作を上梓すると、たちまち大ベストセラーとなり、同作はカウスブルックのマスターピースとされている。

原題の *Aaibaarheidsfactor*（直訳：なでられる能力の尺度）

は作家みずからの造語であるが、この言葉が後にオランダの国語辞典の新しい見出し語（辞書当該ページ画像参照）として収録されたほどであったことは、本作の知名度の高さを物語っている。本書の表紙には、猫のような手触りの素材が使われており、それは初版から現在までずっと踏襲されている。1969年にアムステルダム市エッセイ賞、1975年にすべてのエッセイ作品に対してオランダの荣誉ある文学賞であるP.C.ホーフト賞を受賞。また、オランダで2002年に結党された「動物（のための）党」の擁護者としても知られている。

aagje : *nieuwsgierig ~ nieuwsgierig persoon, naar de hoofdpersoon Aagje uit een 17de-eeuwse klucht
aai I *de* (m) [-en] het aaien, streling II tsw gebruikt bij het aaien: * ~ *poes!*
aaibaarheidsfactor *de* (m) mate waarin een dier aaibaar is
aaien [aaide, h. geaaid] zacht met de hand over iets heen gaan, strelen: * *een poes* ~
¹ *aak* *de* [aken] vaartuig met platte bodem en brede boeg
² *aak* *de* (m) [aken] soort esdoorn, Spaanse aak (*Acer campestre*)

本書は、動物、主に猫についてのエッセイ集で、1969年の初版時に収録された分（11篇）と、後の1978年に増補された分（5篇）の二部構成となっている。理系文系どちらの頭脳も持ち、哲学者でもある作家の知的な遊び心、ときに痴的ユーモアも見られるエッセイである。ディープな猫好き、動物好き、哲学的思考の好きな読者におすすめの一作。

なお、評論家としての最も有名な著作は『(旧オランダ領) 東インド、(旧日本軍) 抑留所 シンドローム』（1992年刊。近藤紀子氏による抄訳『西欧の植民地喪失と日本—オランダ領東インドの消滅と日本軍抑留所』1998年、草思社刊あり）である。戦前のスマトラ島で生まれ育ち、少年時代に旧日本軍抑留所の生活を経験した作家が元植民地支配者であったオランダ人に自省を促した同作は、オランダ国内で大論争を巻き起こした。哲学的な著作への評価も高く、1994年には、フローニンゲン大学より哲学の名誉博士号を授与されている。

コントラクト
契 約

シアワセニ ココチヨサゲニ ササヤイテイル

猫 (Felix blandus susurrans) は、この世で最もなでられる能力に優れた存在である。猫のこの能力は、わたしの知るかぎりにおいて能動的な受動性という特性を持つ唯一の例である。言いかえれば、猫はその能力を肯定原理、つまりポジティブな基本技^{わざ}として用いているのである。

わたしの言おうとしているのは、日常「頭^{あたま}を擦りつける」と呼ばれる仕草^{しこう}のことである。実のところ、それは、相手につけるのではなく、自分に引き寄せているのだ。猫は、相対性原理を用いて（猫はつまり動物界のアインシュタインでもある）、何かをわがものにする。愛撫^{なでなで}を外界から招来しているのである。そもそも、通常の愛撫というのは、運動系の手と（立っていたり、すわっていたり、横になっていたたりする）静止系の動物との間に生じるものだ。ところが、静止系の手（足・靴・テーブルの脚・冷蔵庫のドア）と運動系の動物との連関でも愛撫が生じることを猫は見とったのである。

次の実験がそれを如実に示している。まず、猫をテーブルの上あるいはベッドの上に設置する。そして、猫の鼻の約 10 cm 手前に、手を猫の背丈と同じ高さにかざす。もし猫が「あ、なでなでの時間だ」と思えば、前進を開始し、手をなでるようにくぐり抜けていく。この操作を何度か反復する。すると、猫はたいてい、闘牛のようにくるりとまわれ右をし、興味をそそられ、喉鳴らし機構^{ゴロゴロメカニズム}が発動する。では、次はこうだ。手をはじめよりも 5 cm 高くかざす。すると猫が愛撫を逃すまいと手の下に来て、前足を地から離し、小さくぴよんと跳ねあがることになる。

この実験を続けると、猫はたいがい、手を捕まえようとする。それは、手を前足で抱きかかえ、後ろ足で蹴り続ける（オランダでは《自転車こぎ》と呼ばれる）のが目的であり、その間、ネズミ型をした手のひらの月丘^{あつら}（お誂えむきだ）は、あま囓みの標的となる。

解剖学的にも、猫はなでられる能力満点の作りになっている。その毛は特別仕様であり、本人ならぬ本猫^{ほんにゃん}みずからなでコンディションを維持している。犬というのは、どうもザラザラ、ベタベタしすぎていることが多く、かわいがった後には手に

ラノリンのにおいがする（ちなみに、それはそんなに大騒ぎするようなことではなく、また、だからといって犬を過剰なほど頻繁に洗ってはいけないということではない。ただ、そういうことをするのは、とことん気のふれた者か、徹底的な動物虐待者だけだ）。猫は、常にいいにおいである。かの大作家、W・F・ヘルマンズが「猫のキロ」という話の中で記しているように、猫はクリーニングしたての毛布のにおいがする。

猫のあらゆる部位が、なで仕様である。前足でさえもだ。雪の上を歩くときにように引っこめて、ぷるるんと揺さぶることがよくあるにしても、である。つま先が黒っぽい色をしている場合、その足は、下から見ると、レーズンパンのように見える。それは、たまに（たとえば、キッチンカウンターからビフテキをくわえて）猫が飛び降りるときなどにかいま見られる。

しかし、なんと言っても最たるなで対象は頭部である。猫の頭部には、7つの個別のなでゾーンがある。つまり、ひたい、左右のほっぺた、左右のヒゲ山、あごと喉（場合によっては、鼻を選択することも可）である。トラ柄の個体には、いわゆるなでラインという基本パターンが表示されている。それは、弾道についての本のイラストに見られる点線に似たものである。

ひたいには、大文字のM型（「ミャ〜」のM）のなでラインがある。同様に、両方のほっぺたには、横向きになったV（オランダ語の肉の^{vlees}V）の字がある。猫によっては、これがヘブライ文字のまともや横向きの^{スイン}ψ（^{ジュエリー}ψωμϰの最初の文字）である場合もある。三つまたの一番上の線が目のあたりから、一番下が口のわきから、そして、もしあるとすれば、真ん中の線はヒゲ山のふもとから始まっている。それらの線は耳のつけ根あたりで合流する。耳殻には、気になる部分がある。わたしは、これまでそれが何であるかを誰かから指南されたこともなく、その機能について記述したものを目にしたことすらない。それは、そこにある切れ込みのことで、まるで、何者かが誤って耳の先端をはさみで切りとり、その傷跡に後でだぶだぶの猫耳用の素材を当てて、いいかげんに繕ったかのようだ。

猫の体毛は短くなくてはならない。その点、あらゆる猫は完璧に条件を満たしているが、わたしの見解では、長毛の猫というのは完璧にはいささか欠ける。それが

いわゆる「（品評会での）お人形さんごっこ」に参加させられたのであればなおのことである。

最も短い、実際、^{ミクロ}微細といってもいいほどの毛は、鼻の水平な部分に見られる。

また、鼻を正面から垂直に見ると、ギリシア文字の ^{ウプシロン}Υ に似ている（ご覧のとおり、猫は「文字」で覆われている）。そのウプシロンのたて棒を含め、口は三枚羽根のプロペラ型をしており、そのうち、下の二つの羽根の末端がくると巻きあがってかの有名な猫^{ちゃん}ス^{マイル}を形成しているのである。

そんなわけで、本来の、つまり能動的な意味での^{なでなで}愛撫が、失望とは無縁な行為であることは自明なことである。猫は実際、ありったけの愛撫を全力で引き出そうとする動物王国唯一の存在である。愛撫を一身に受け止め、愛撫に向かってぐいぐい身をこすりつけ、できる限り強く、できる限り長く、愛撫を享受しようとする。猫の愛撫への向き合い方は、最後の一滴まで貪欲に飲みつくそうとするそれである。

その一方で、そういう猫こそ、背中をかがめて愛撫を避けたり、手をするりとくぐり抜けたり、あげくの果てには、なるべく早くこの場から退散したいと言わんばかりに、さっと逃げ出して行くという、他のどの動物よりも性悪なふるまいに長けている。すると、ひとりさびしく後にとり残された者は、うちひしがれ、呆然としてしょんぼりと、猫の形をした空虚を見つめることとなる。

もちろん、無関心なネコをその気にさせることも十分可能である。というのは、以下のモットーを慎重に適用してみれば、時にいい結果をもたらすこともあるからだ。

——いやなら、力づくだ（ゲーテ「魔王」より）——

それから、喉の愛撫は、ご機嫌ななめに振りまわすしっぽを静止させたり、落ち着きのない下半身を弛緩させたりするのに最適な手段である。しかし、リスクは残る。もしも、まるで気が乗らないとなれば、猫はいつでもするりと逃げていく術を知っており、すると諸君は、もうそろそろ許してくれたかなと不安に苛まれつつ、何時間もうろうろする羽目になる。唯一の慰めは、以下の考察に頼るしかない。

——非難される可能性のない褒め言葉に、何の価値があろう？（ポーマルシェ『フィガロの結婚』より）——

もしも猫に気が乗らないという才覚がなければ、すべては最初から結果がわかっている無意識の条件反射に過ぎず、万物の中で、なでられる能力に最も優れた存在にはなり得ないだろう。猫とその能力の奇跡的なところは、自由意志にある。^{なでなで}愛撫という行為は、双方の合意によってのみ生じる。それはつまり、ある種の^{コントラクト}契約である。

人と猫とは、自由な意志で結びついている。そして、両者ともが溶解しそうになる行為、すなわち、心ゆくまでの限りなき愛撫——自然界ではありえないような、もしくは、ほとんど類を見ないような様態——をおたがいに提供し合うのだ。

D I Y工作猫

前章では、猫工場から届けられる猫の完成品について言及した。現在流通している猫の大部分はこのタイプに該当するが、そのかわり、ご存じのように、家庭での手作業による工作猫というものも存在するのである。

猫というものは、おそらく、西暦でいえば紀元前五世紀に、中国（**Cathay**）で発明された（J. ニーダム他編/『中国の科学と文明』第七巻 636～901 ページ、『文明の滴定』を参照のこと）。また、ヨーロッパでは、中世初期、シチリア島のカタニア（**Catania**）に、猫の祖先が出現している。「ミレメータ写本」中の挿絵を見たところでは、これは、まだ、きわめてぎこちなく原始的な型のものであった。

「ラ・カッツァ・スバレストラータ（アヤ マチ ニ ミチタ インケイ *La **Cazza sbalestrata***（ヴェネツィア、1232 年）という戯曲の現存する断片には、この初期ヨーロッパ猫のうちのある一匹がぞんざいにこすりつけた頭のおかげで、とある高貴な女性が足を骨折したという話が記されている。

その後の二百年間というもの、猫にさしたる変化は見られなかったが、中世末期には初の改良が行われた。1450 年頃、南ドイツの猫作家がヒゲを発明したのだ。また、1467 年には、木工好きのスイス人修道僧、ヘルヴェティクス・カウダリニュス考案によるしっぽが、それに次いだ。この初期のしっぽは木製で、こんにち今日われわれが知っている完璧な器官とはおよそかけ離れたものだった。

最初の「ミャー」の起源に関しては、一説には、中国からシルクロード経由で伝来したとされ、また他説によれば、当時、すでに職人技の猫が製造されていたフランスのジュラ地方であるとされるなど、多くの記述がある。そして、1489 年、ゲントのアルケミスト錬金術師および数学者、ネズミ博士と呼ばれるロナルドゥス・ムスが、「デ・

フェリシス・ススランデ（ゴロゴロ申す猫）について」という論文を発表した。これをもとに、十六世紀になる前には、初の喉鳴らし機構ゴロゴロメカニズムが開発された。それにより、猫には現在もなお世界中で製造されているものと同様に——われわれがすでに見てきたとおり、工業的にだけでなく、自作という手段においても——、人格ならぬ猫格にゃんがともなうこととなった。

アマチュア猫作りたちというのは、通常、自作の猫をことのほか自慢するものであり、事実、そこそこ器用な日曜大工（D I Y）愛好家が百時間足らずで組み立てたその種の猫は、どこから見ても、はるかに高価な工場生産のものに少しもひけを取るものではない。

近年、猫は、ハンドブック付きの組み立てキットの形（**kat-e-kit**）でも入手できるようになり、ずぶの素人にでもきちんと機能する猫を作ることができるようになった。真の工作好きであれば、それでもなお、自分のデザインに合わせて好きなように工夫を凝らし、その場の思いつき、つまり、キッチンの引き出しや籐かごの裁縫箱から、あるいはまた、リサイクルショップで偶然見つけたものを用いるに違いない。

しっぽふりのパタパタ装置やミャーボックス（梅蘭芳製メイ・ランファン）、そして喉鳴らし機構メカニズム（ホンダあるいはカワサキ製）など特定の部品については、もちろん平均的なアマチュアの手には負えないので、専門店で購入しなければならない。さらに、店で購入する必要のある部品は、猫のタマタマー組（♂オプション）、25セントコイン一個分相当のヒゲの束、ファスナー、そして、いわゆる「モーチェス・ボンケン」と呼ばれる、緑か黄色の透明なガラスのビー玉二個（好奇心のかけら入り）である。さらに、肉球の完成品二十二個入りセットを購入すれば——キャスターつきモデル

をご希望でない限り——、作業の工程を大幅に省くことができる。また、すでにフェルトに包まれ、ミシン目が入っている大変いい猫鼻も店にある。あとは、針と糸、余り毛糸、接着剤、輪ゴム数本、細い銅線ひと巻なども必要だ。読者には、別ページの材料リストを参照されたい。

はじめに、ティーコージーか朝食用のパウンドケーキを用いて、表皮用の布地に型を書きうつす。ちなみに、本当の猫皮に代わり、しま模様のビロード、古くなったひじかけ椅子の張り布などの類なら、どんな素材でも使用できる。中には、籐かごの裁縫箱の中にあつた端布を用いる者も、また自分で織つた絨毯を使う者もいる。この後、胴体部分を裁つておく。

続いて足の番だ。これは編み物ポーズをとる関係上、折りたたみ可能なものでなければならない。まちがつてもウサギ用部品を使用しないよう、注意が必要である。製作家の多くはこう考える——なあに、わかるもんか——。しかし、耳だけをとつてみても確かに違ふのだ。そのうえ、そのようなハイブリッド種は、そのふるまい（うさぎ跳び、菜食主義など）からも、はっきりと見分けがついてしまう。

足ができたら、頭に取りかかる。これには、使い古しのテニスボールが利用できる。あるいは、オレンジ、もしくはグレープフルーツでもいい。そこへ両側のヒゲ山を取りつける。表布には穴をふたつ開け、その裏側にガラスのビー玉をはめ込む。耳を頭の上に縫いつけ、鼻を慎重に取りつけたら、ヒゲを挿し込む。

次に、頭と足とを蝶つがいで胴体に連結させる。そして、ミャーボックス、喉鳴らし機構も、サッカーボールの内チューブを利用した胃袋同様、所定の位置に取りつける。胴体には、猫用の詰め物（最高の猫用の詰め物とは、今も昔も、引き裂かれたラブレターの残骸である）を詰めこみ、（おなか全体を縦断するように）ファ

スナーをつけて縫い閉じる。

さて、いよいよ全工程の中でも最もデリカシーを要する作業だ。すなわち、しっぽの取り付けである。その難しさに関しては、ポッカッチオがこう記している。

——きわめて重要なのは、この作業の最中は、言葉を発さないということだ——。

しっぽの取り付けが済んだら、あとはおしりの穴用のレーズンをくっつけるのと、猫タマタマ（♂オプション）をぶら下げるのを残すのみだ。さあ、猫はこれで使用準備完了である。続いて、すべてがうまく機能するかどうかを確かめるために、いくつかのテストを開始しよう。

全体のバランスを見るには、まず、猫を作業台の上に四つ足で立たせてみるという。正しく組み立てられていれば、頭を上げ、しっぽは天を指し、下半身は上半身よりも心もち高くなっているはずだ。それが逆になっていた場合には、頭としっぽが、おそらくあべこべに胴体についているのだ。鼻先に生の牛肉を差し出し、猫が後ずさりすれば、このミスが発生したことは確実である。このテストでは、パクつき、ミャー鳴き、飲みこみ性能も、同時に試すことができる。

これらが正常に機能していることがわかったら、むこう側で鳥たちが彼方此方を飛び交う窓辺に猫を置くことで、ミャー鳴き性能をさらに細かくテストできる。もし、組み立てミスを犯していなければ、猫はこの時、ヤギの鳴き声を思わせるような特徴のある声を発するはずだ。あごを閉じておくためにつけたゴムは、いくらかゆるんで下あごに独特の振動を生じさせ、その振動は体内を通る別のゴムを経由してしっぽの先まで伝わる。

これらの性能が滞りなく機能することがはっきりすれば、ついにアマチュア猫作りが思い焦がれた瞬間、見果てぬ夢が現実となり、この偉業に有終の美を飾る時が訪れる。つまり、「なでなで」－喉鳴らし^ゴ反応^ゴテストである。

このテストの結果を得るには、おそらく大きなベッドの上が適している。たくさんクッション、ほのかな照明。すこし恥じらいながら、猫作りはなではじめる。はじめは喉、そこからほっぺた、それから耳のうしろ。そして、早くも喉鳴らしマシンが始動する神秘を体験するのだ（うまくいかない場合には、配線を替えること。赤端子はプラスであり、マイナスは本体につながる）。しばらくすると、猫本体に連鎖反応が起きる。すると、製造者のため息にほんの時おりかき消される、轟くような喉のゴロゴロ音のあいだから、猫が頭をぶつけてくる鈍い響きがゴツン、ゴツンと聞こえるのだ。

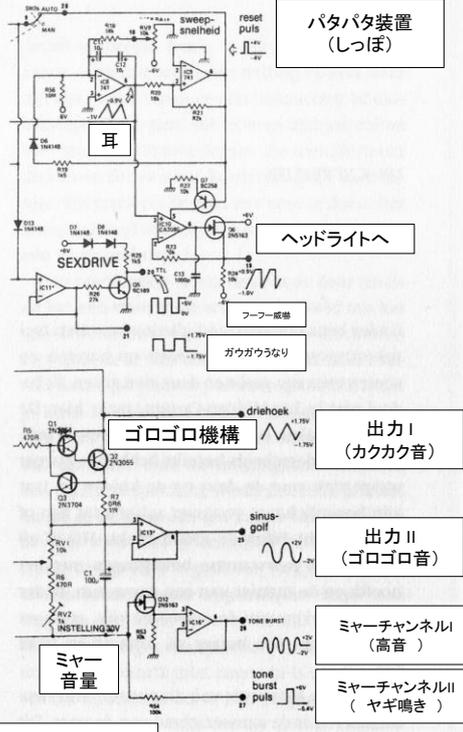
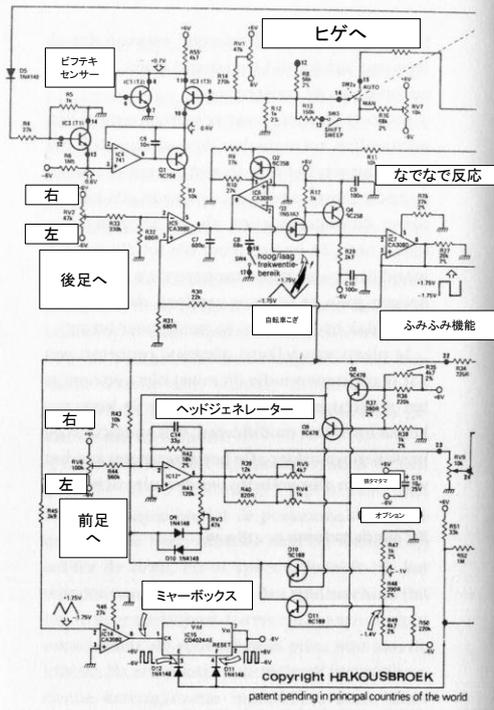
さあ、これでもうテストすべきことはなにもない。賢明な猫作りならば、猫をひとたびその腕に抱いたらもうけっして離さないようにすることだ。それは、あらゆる猫が、自家製であれ、工場生産であれ、現時点ではいまだ誰にも解決することのできない唯一の設計ミスを抱えているからである。猫は、隙があれば、庭に逃げ込んだり、屋根に飛びあがったりすることがあり、そうすれば、諸君はもう二度と猫にまみえることはないのだ。

この欠陥の見られない猫の組み立てを新たに何度も試みるよりは、猫作り自身に修正を施すというのが、おそらく最上の策であろう。それは、去っていった猫についてのあらゆる記憶を完全に消去する脳の手術である。

DIY 工作猫の材料リスト

分量、個数など

ティーコージー、または朝食用パウンドケーキ	1
折りたたみ式の前足	2
自転車メカニズムつきの後足	2
サテン地の肉球	22 個入りセット 1
詰め物（例：ラブレターを引き裂いた断片）	2~3000 グラム
表皮用の布（縞模様のビロード、モケットなど）	1 メートル
ファスナー	1
ランプ掃除用はけ、またはパタパタ装置つき簡易しっぽ	1
テニスボール、グレープフルーツでも可	1
三角袋を切り開いたもの	2
フェルトにくるまれたミシン目入り木製の鼻	1
モーチェス・ボンケンという名の透明なビー玉、緑か黄色	2
ヒゲ山（針山またはキンカンの実など利用）	2
ヒゲの束（25 セント相当）	1
紙やすり	1
胃袋（例：サッカーボールのビーチボールなど、あまり小さすぎないもの）	1
ヴァイオリンの弦	1
ミャーボックス（梅蘭芳製）	1
喉鳴らし発動機（カワサキ、あるいはホンダ製）	1
輪ゴム	6
ビロードの袋入り猫タマタマ	1
レーズン	1



DIY工作猫 配電図